

---

# 遊戯王GX～HERO's Fellows～

アトラン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



メディアを舞台に繰り広げられる学園物語である。

## 第01話 もう1つの英雄（前書き）

始めまして、アトランです。駄文なところも多々あると思いますが、よろしく願います。

それでは早速、HERO'S FELLOWS、始まります。

## 第01話 もう1つの英雄

生き物の一生に置いて、終わりは常に側にあり、同時に遠くにあるものである。それは、いつ、どこで現れるかは、誰にも分からない。これは、ある日唐突に終わりを向かえ、なぜか第2の人生を歩むことになった少年の物語である。

(?視点)

…?この白い空間なんだ…あ、夢か?よくある夢か。よし、夢ならとつとと覚める…?なんだこの紙…へ?自己紹介しろ?…誰もいないのに自己紹介しろ?というより誰だ?この紙置いたの…。

?また紙…いいからやれ。やったらいい特典付けるぞby作者…仕方ないな。オレの名は流明遊夜<sup>しゅつみやうつや</sup>。転生する前は勇夜つて書いたけど、こつちにきたらなぜかこうなっていた…。それとオレは転生者だ。でもオレTRUEEEEE!は無理。

そもそも転生する前でもデュエルの腕微妙だからいきなり強くなつたら自分が怖くなる…まあ、転生した世界がアニメの遊戯王で、時代がDMで、今GX時代周辺だから少し助かった点があるからな。5Dsの時代に転生したら多分遊星やジャックに勝てない。でも、GXだから最強のドロー運の持ち主である十代と、積み込んでいるんじゃないのかと思うくらい十代同様最強のドロー運を持つ丸藤亮がいるからそこが問題だからな。

そうそう、オレのデッキについて紹介しよう。オレのデッキは…？  
ジリリリリ…？…？…ベタな目覚めパターンだなおい…。

(作者視点)

ジリリリリと、目覚ましが鳴り、1人の人物がふとんの中から手を伸ばし、目覚ましを止めようとしている。その人物は、女のような男のような、中性的な顔立ちで、髪は、枕の下に隠れているが、ある程度長いと予想できる。

また、おそらく立ち、前から見れば右側に3つの薄紫色の線が入っており、枕の下の髪に、髪が隠れているが、ある程度まで続いていると思われる。

その人物が、目覚ましを止めるのに苦戦していると、部屋の扉が開いた。そこには薄紫色のストレートの長髪で、黒目の、とてもスタイルの良い美女が立っている。その美女がその人物を見て、息を大きく吸い込み、そして…。

「遊夜！！とつとと起きなさい！！！！」

そういうと、彼女はふとんを取り払い、目覚まし時計をすばやく止めた。ふとんの中にいる人物は…おそらく男であろう。髪は長いが、男であろう。胸がないからではあるが、推測の範囲に留まっている。

「遊夜！早く起きなさい！！遊夜！！遊夜！！！！」

「ん…ん…お袋おはよう」

「おはようの前に、何時だと思っているの！！」

「え…」

そういうと遊夜と呼ばれた人物は、目覚まし時計を見た…その時刻



「（ん？まさかとは思うが…）」

遊夜がそう思い始めた途端、遊夜の心を読んでいたかのように、駅にアナウンスが流れた。

「大変申し訳ありませんが、事故により、電車の到着時刻が遅れています。繰り返し、お伝えします…」

「（やっぱりいいいいいいいい！！！！）」

遊夜は、予想が的中し、心の中で絶望の叫び声を上げた。電車が到着したのは、それから10分ほど経った後であった。

「（もしかしたらまだ間に合うかもしれないもしかしたらまだ間に合うかもしれないもしかしたらまだ間に合うかもしれない）」

その後、電車を降り、駅から出ると、そう思いながら走っている。幸い、人通りは少なく、走りやすい状態である。

「！よし、ラスト・スパート！！！」

遊夜は、ある建物を見ながらそう言った。それはドームのようである。どうやら、遊夜の目的地は、あの建物のようにある。そして、遊夜が再び視線を前に戻すと、10mほど前に、人が歩いている。

「！退いて下さい！！！！！」



遊夜は急いで止まろうとしながら、前を歩いている人物に叫んだ。  
ほぼ目の前にその人物が迫ったが、ぶつかるとはなかった

「へび！…いてて」

…遊夜自身が、ギリギリのところまで転んで、幸い前の人物には被害はなかった。だが…。

「な、なんとか止まれた…ああああ！！で、デッキが…！！！」

そう、遊夜が転んだ衝撃で、デッキが、デッキケースから飛び出したのである。路上にはカードが散らばっている。幸い、遊夜と前を歩いていた人物以外に人はいなかったため、カードが踏まれることはなかった。

「やばい…！！！」

「…手伝おう」

「だ、大丈夫です！オレのせいですから！！！」

「困ったときはお互い様だ」

そういうと、その人物は遊夜のカードを、遊夜と共に拾い始めた。カードを全て拾い終わり、遊夜はその人物に連続で頭を下げている。

「ありがとうございます！ありがとうございます！！！」

「気にするな。カードは大事だからな」

彼はそう言っではいるが、遊夜はまだ頭を下げている。すると、彼は、ん？という顔をした。そして、彼は遊夜の肩を叩いた。遊夜は、不意に叩かれたため、少し驚いた。

「ラッキーカードだ。このカードが、君の元へ行きたがっている」

「へ？い、いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます！！ありがとうございます！！！！」

再び、遊夜は連続で頭を下げ始めた。彼は微かに笑い、遊夜に重要なことを言った。

「君は、そうとう急いでいたんじゃないのか？」

「…し、しまったー！！！！！！ありがとうございます！！！！」

遊夜は頭を上げ、叫ぶと、再び頭を下げ、走り去っていった。彼が、遊夜に渡したカードを、デッキケースにしまい…。

「…これからが楽しみだな」

彼はそういうと、再び歩き始めた。

「おおおおおおおおおお！！！！！！」

遊夜は必死の形相で走っている。そして、目的地の入り口についた。受付と思われる場所には、1人のサングラスの男性がいる。

「ん？君は？」

「受験番号58番、流明遊夜。電車の事故の影響で遅れてきました  
！！！！」

「君もか…なら、急いだほうがいい。君と同じように遅刻してきた子がデュエルをしているが、もうすぐ終わるかもしれない」



「……さすがに痛いか……。それで……オレとデュエルする教官は……」  
「ワタシナノーネ。このクロノス・デ・メディチがデュエルするノーネ」

「（クロノス先生が相手……か。不足はない）分かりました」

（遊夜視点）

クロノス先生が相手……なんか見たことあるぞこのパターン……そういえば、さっきのヤツどこいった……見覚えあるんだけど……。まあいか。オレはデッキケースからデッキを取り出すと、シャッフルしてデュエルディスクにセットした。

クロノス先生のほうを見ると、デュエルディスクとコートが一体化している珍しいディスクにデッキをシャッフルしてセットした……お、なかなかかっこいいな。

「それでは、デュエルを開始するノーネ」

「！は、はい」

……デュエルするってこと忘れて見入ってた……クロノス先生もう手札引いてる。急いでオレは手札となる5枚をデッキから引いた。

「デュエル……」

遊夜 LP4000 手札5      クロノス LP4000 手札5

さあ、デュエルスタートだ。オレのデッキ、なめて貰ったら一気に……。

「先攻は譲るノーネ（このドロップアウトを倒して、名誉挽回ノーネ）」

「え？いいんですか？」

…さっそくなめられたか？さっそくなめられたのか？？まあいいか。

「それじゃ、ドロー」

引いたのは…強欲な壺か。オレも案外、ドロー運があるみたいだな。

「手札からマジックカード、強欲な壺を発動。その効果で、デッキからカードを2枚ドロー」

ドローしたのは………？彘？？あれ？おつかしいな…こんなカード入れたっけ…入れたっけオレ……その前にこのカードこの時代にあつていいのか？……まあいいや。

「E・HEROフォレストマンを、守備表示で召喚！」

オレがディスクにカードを置くと、半身が木で出来た、肌が明るいい緑色の男が現れた……そう、オレのデッキはE・HERO。漫画版の十代寄りのデッキだ。それじゃ、さらに…。

「手札からHERO'sボンド発動！オレの場にHEROが存在している場合、手札のレベル4以下のE・HEROを2体、特殊召喚できる。オレは、E・HEROレディ・オブ・ファイアとE・HEROワイルドマンの2体を、守備表示で特殊召喚！」

フォレストマンから光の線が2つ出ると、白いタイツを着た少女と、上半身裸で禪をつけた野生児的な男が現れた。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。そしてエンドフェイズ、E・

HEROレディオブファイアの効果発動！自分フィールド上の表側表示のE・HEROの数×200ポイントのダメージを、相手ライフに与える。

オレの場にはレディ・オブ・ファイアを含めた3体のE・HEROがいる。よって、相手ライフに600ポイントのダメージ！ファイア・バレット三連射！」

レディオブファイアの周りに3つの火の玉が出て、それがクロノスへと飛んでいった。：事前に言っておこう、これはソリッドヴィジョンだ。人がケガをするようなシステムはない。例外はあるかもしれないがケガをするようなシステムではない。温度を感知するシステムはないはず。

クロノス LP4000 3400

「熱い！熱いノーネー！」

：なんでこうなるんだ？なんで熱いんだ？クロノス先生には分からないことが多い…。

遊夜 手札1 LP4000

モンスター E・HEROフォレストマン×1(守)、E・HEROレディオブファイア×1(守)、E・HEROワイルドマン×1(守)

魔法・罫 セットカード×1

「それではワタシのターン、ドロー…」

：クロノス先生がにやけた…いきなり来るか。

「ワタシは手札からマジックカード、強欲な壺を発動。その効果で、デッキからカードを2枚ドロ。さらに、二重召喚を発動。これでこのターン、ワタシは2回まで、通常召喚できるノーネ。ワタシは、トロイ・フォースを召喚」

クロノスがカードを置くと、木で出来た木馬が現れた。あのカードはたしか…えーっと…。

「トロイ・フォースは地属性を生け贄召喚する場合、2体分の生け贄にすることができるノーネ」

！そ、そうそう、その効果だ。…あれ？たしか、クロノス先生のデツキって…。

「ワタシは、トロイ・フォースを生け贄に…古代の機械巨人を召喚するノーネ…！」

「やば！使うカードは違うけど、オレのターン入れて2ターンで古代の機械巨人を…まさに、GX第1話のデュエル展開！…あ…ラッキ

「それでは「それじゃあ相手ターンのメインフェイズ、エフェクト・ヴェーラーを墓地へ送って、効果発動！効果対象を、古代の機械巨人に」？！な、なんナノーネそのカードハ！？」

エフェクト・ヴェーラー…何故か手札に来ていたカード。まるで、この状況を読んでいたみたい…まさかな。オレがそう思っている、と、半透明のエフェクト・ヴェーラーが現れた…？一瞬オレのほうみたよう…まあいいか。

エフェクト・ヴェーラーが古代の機械巨人に光を当てた…うん、特

に変化はないな。

「…何かと思えば何も無いノーネ。ただの使えないカードナノーネ」  
「そうでもないんだけどな…転生前でよく助けられたからな」。エフ  
エクト・ヴェーラーのお陰で逆転できたこともあつたし。

「そう言っていると、足元をすくわれますよ」  
「そんな訳ないノーネ！バトル！！アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人で、そのさつき  
のドロップアウトボーイとは違うけれど、ペラペラなコミッ  
クヒーローのレディオブファイアを、攻撃ナノーネ！アルティメッ  
ト・パウンド！」

アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人の拳が、レディオブファイアに迫った。だが、甘い！

「それじゃ、エフェクト・ヴェーラーの恩恵、見せてあげます！リ  
バースカード、オープン！くず鉄のかかし！！相手モンスター1体  
の攻撃を無効にし、再びセットする」

「甘いノーネ！アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人の効果で、このカードが攻撃すると  
き、相手はダメージステップ終了時まで、マジック・トラップカー  
ドを発動できないノーネ」

「残念、エフェクト・ヴェーラーは、相手ターンのメインフェイズ  
に手札から墓地へ送ることで、相手モンスター1体の効果を、エン  
ドフェイズまで無効にする！」

「…ば、バカーナ！！！」

レディオブファイアの前に、ジャンクパーツで出来た力カシが現れ  
て、アンティーク・ギア・ゴレム古代の機械巨人の拳を受け止めた。

「くうくカードを2枚伏せて、ターンエンドナノーネ（セットカー



ドは聖なるバリアーミラーフォースに収縮。問題ないノーネ」

クロノス 手札2 LP3400

モンスター アンティーク・ギア・ゴレム 古代の機械巨人×1

魔法・罫 セットカード×2

「オレのターン、ドロー！」

…よし！このターンで決める！！

「E・HEROフォレストマンの効果！このカードが表側表示のときに、自分のスタンバイフェイズに、デッキ、または墓地から、融合を手札に加える。デッキから、融合を手札に！」

フォレストマンから緑色のオーラが放たれた。オレはデッキから融合を手札に加えた。次はつと…。

「手札からマジックカード、E・エマジエンシー・コールを発動！このカードは、デッキからE・HEROを呼ぶマジックカード…その効果で、E・HEROエアーマンを手札に！」

さあ、ショータイムの始まりだ！オレは手札にエアーマンを加えると、手札を持っていないほうの手を上へ上げた。そして、指をこすりつけ、鳴らした。

「イツツ、ショータイム！手札からE・HEROエアーマンを召喚！エアーマンには2つの効果がある。1つ目は、自分フィールド上のこのカード以外のHEROの数だけ、魔法・罫カードを破壊する。2つ目はデッキからHEROをサーチする効果」

「な…ま、まさーか…」

「オレは、1つ目の効果を使用する！破壊するのは、オレのセットされたくず鉄のかかすと、クロノス先生のセットカード2枚！ターボ・ストリーム！！」

エアーマンのタービンから竜巻が発生して、全てのセットカードを吹き飛ばす！ヒュー、大迫力。

「その効果にチェーンし、速攻魔法、収縮を発動するノーネ！その効果で、エアーマンの攻撃力を半減するノーネ！」

エアーマンの前に鏡が出てきた…その鏡を見たエアーマンの体が、半分くらいの大きさまで小さくなった…あんな感じに小さくなってたっけ？ま、いっか。それでもう1つは…げ、聖バリ！エマージェンシー・コールがエアーマンかライト・ジャスティスが来なかったら危なかった。

E・HEROエアーマン    ATK    1800    900

「…デスーガ、ワタシーの場にいる古代の機械巨人アンティーク・ギア・ゴレムの攻撃力と守備力は共に3000！そんなペラペラなコミックヒーロー如きじゃ、倒せないノーネ」

「なら、見せてあげますよ。オレのE・HEROを！手札からマジックカード、融合！エアーマンと、フォレストマンを融合！」

融合の渦が出てきて、その中にエアーマンとフォレストマンが吸い込まれた…今回出すのは、こいつだ！

「こい！E・HERO GreatTORNADO！！」

渦から、黒いマントを羽織って、明るい緑と、黒の2つの色で出来

たタイトによく分からない装備を付けたHEROが現れた。

「！だ、ダケドモ、攻撃力は2800。ギリギリ、ワタシーの古代アンティの機械巨人イクキア・ゴーレムのほうがギリギリ上ナローネ！」

「残念、E・HERO GreatTORNADOが召喚に成功したとき、相手の表側表示モンスターの攻守を半減させる！タウン・バースト！！」

<small>アンティク・ギア・ゴーレム</small> 古代の機械巨人	ATK	3000	1500	DEF	3000
1500					

「ば、バカーナ！ワタシーの古代アンティク・ギア・ゴーレムの機械巨人が、たった1500に！？」

「他のE・HEROを攻撃表示に変更してバトル！E・HERO GreatTORNADOで、古代アンティク・ギア・ゴーレムの機械巨人を攻撃！スーパー・セル！！」

グレイトルネードが竜巻になって、そのままゴーレムに突撃した。さすが名前にトルネード付くだけあるな。って思ってる間に、ゴーレム破壊されたな。

クロノス LP3400 2100

「そして、レディ・オブ・ファイア、ワイルドマンの2体で、ダイレクトアタック！！ダンシング・ファイア！！ワイルド・スラッシュ！！」

レディ・オブ・ファイアがいくつかの火の玉を投げ、ワイルドマンが背負っている剣で切り込んだ。

「ペペロンチ〜ノ!!」

クロノス LP2100 8000

勝てた〜!つと…いつものヤツつと。

「ナイスデュエルでしたよ、クロノス先生」

これがオレのデュエル後決め台詞!クロノス先生に出来た〜!

「くう〜マサーカ、このワタシーが、ドロップアウト如きにまた負けるとは〜」

…今、気づてならない言葉聞こえたぞ……ま、勝ったからいいか。

## 第01話 もう1つの英雄（後書き）

第01話、どうでしたか？

誤字、脱字、指摘、感想をドシドシ受け付けております。

## 第02話 VS万文目の取り巻き（前書き）

第2話にて、私が考えるこの小説の中に登場してくるオリキャラの中で、メインの1人であるオリキャラが登場します。それでは、どうぞ。

## 第02話 VS万丈目の取り巻き

(遊夜視点)

オレは正直、GXで無双できる訳がないと、思っていた。カイザーや十代、それに万状目や明日香にシスコン吹雪までいるから、無双できる訳がないと思っていた……その予想は的中した。何故なら……。

「…なんでこの2時間と30分ぐらいで十代に15連敗してんだろオレ……」

「んつと…わりい」

デュエルアカデミアに到着…というより試験会場で十代や翔、三沢には会って、十代とデュエルする約束して、船で1回デュエルして勝ったけど、アカデミアについて、校長の話スルーして、制服受け取ったらレッドでヤッターと思ってたら3時間後ぐらいにこれぐらいの絶望してるからな…どうなってんだよあいつのデッキ…。

1つのパターンだが、オレのターン、適当なE・HERO攻撃表示で召喚、2枚セット、エンド。十代のターン、ドロ。ヒーロー・アライブ、バーストレディ or フェザーマン特殊召喚、召喚しなかったほうを手札から召喚、R・ライト・ジャスティス、オレのセットカードフリーチェインじゃない。

全破壊、融合、フレイム・ウイングマン、巨大化、フレイム・シュート、バーン効果でドバーンと終了…このパターン多いぞ！

というより、なんでヒーロー・アライブ使ったんだ？！十代なんで持ってる！！？オレサイド入ってるけど…。というよりどういうドロ運してんだよ！このパターン15回中6回ぐらいあったぞ！！オレが召喚するヤツ違ったけど、それでも守備貫持たせてトドメが

あつたぞ…！

「十代…お前、どうなってるんだ??」

「んつと…さあ」

「とにかく…アニキすごいっす」

「たしかに…十代すごいんだな…」

「ま、まあな…遊夜、大丈夫か？」

「…大丈夫だったら、体育座りしないから…」

フッフ…そうか、これが絶望か、これが絶望なのかアポリアよ…。

…絶望他にもあるけどよお…これも絶望なのか…。フッフッフ…。

「ゆ、遊夜?!いきなり笑い出してどうしたんだよ遊夜!？」

「流明君しつかりするっす!」

「しつかりするんだなあ!」

十代に翔に隼人…オレに構うな。どうせオレなんか…どうせオレなんか…。

「そ、そうだ!これから、デュエルリングにいくっす!パンフレットに場所載ってるから、行ってみるっす!!!」

「そ、そうだな!行こうぜ、遊夜!」

十代に翔、そういう気休めはよしてくれ…どうせオレは十代に勝てない男ですよ…だ…。

「と、とにかく気晴らしに行くんだな。きっと、気が変わるんだな」

「…そうする」

…十代やカイザー以外ならオレ…結構勝率あるような気がする…う



ん、多分ある。多分結構あるはずだ……。オレはそう思いながら、足取り重く、翔や隼人の案内で、デュエルリングへと向かった。

デュエルリングへと着くと……知っているが、先客がいた。オレたちを見ると、先客のうち2人が、オレたちに絡んできた。

「おい、ここに何のようだ」

「ここは、お前達のようなクズレッドのくる場所じゃない」

……イライラしてきた……オレはアニメの遊戯王デュエルモンスターズの中でも、DM時代の虫野郎と、GX時代の一部のオベリスク・ブルーと、5Ds時代のリアリスト他が嫌いだ。その中でも特に、オベリスク・ブルーの中でも、特に実力もないのに威張り散らすブルーは特に大嫌いだ。

「オレたちはデュエルしに来ただけだぜ」

「お前等バカか？ここは、オベリスク・ブルー専用のデュエルリングだ。あれを見る！」

1人が大声でいい、指で何かを指した……オベリスクの顔か。……趣味悪……このオーナーがデザイン頼んだな多分。

「そんなの関係ないだろ！」

「関係あるんだよ。とにかく、お前等のような……ん……よく見たら110番と58番！」

58番……オレの受験番号で合っているな。オレと十代目立っただろうから別にいつか。

「お前達、何をしている」

「あ、万丈目さん!!」

…サンダーの声聞こえた。サンダーの声聞こえた。万丈目サンダーの声聞こえた。うん、いるね、万丈目。確認すると…予想通りサンダーがいます。

「貴様らは110番と58番!」

「名前で覚えたほうが早くない?」

「名前を知らんから無理がある」

「っていつかアンタ誰?」

十代ナイス質問。オレ知ってるからあんまり質問するのはちょっと気が引ける。

「お前達、このお方を知らないのか!」

「中等部を主席で卒業した、未来のデュエルキングと呼び名高い万

丈目準さんだぞ!」

「未来のデュエルキングか! すっげー!」

「いや十代、まだ決まってないから」

「そういうもんか? よーしとりあえず…万丈目、デュエルしようぜ  
!」

…え?今の状況でそれ言える?それよく言えるよね…まあ、ある意味十代らしいっちゃらしいけど…。

「万丈目さんだ!お前のようなレッドとデュエルするつもりはない  
…と、言いたいところだが、いいだろう。オレとお前、どちらが強  
いか確かめてやる!」

そういつて、万丈目はディスクを構えた。…なんたる、何か違和感が若干あるような無いような…。とにかく、デュエルが始まるのか？そう思った矢先、また別の声が聞こえた。

「あなた達、何をしているの!？」

「誰が何してるのー後レツドの人、ここよくブルー生いるからややこしいことになるから注意って、もうなってるか」

…予想したのは天上院明日香だけなけど、登場を予想したのは天上院明日香だけなけど、もう1人の女子何？灰色の髪をポニテールにしているけど…。とりあえず何？灰色ポニテの人。

「！お、お前たち、行くぞ」

「え？は、はい」

「分かりました」

そういつて、万丈目と取り巻き2人がデュエルリングを出た…なんだか苦虫潰したような顔だけど大丈夫か…？気になっている間に、天上院さんと灰色ポニテの人が近づいてきた。

「ここはブルー用のデュエルリングだから、ブルーの生徒がいることが多いから、あまり近づかないほうがいいわよ」

「ま、さつきみたいになことになるから、要注意ね」

「まあ、気をつけるぜ。それで、お前ら名前は？」

「出来れば先に名乗ってもらいたいものね…天上院明日香よ」

「黒夜日菜よ。よろしく」

「おう。オレは遊城十代。よろしくな」

「丸藤翔っす」

「前田隼人なんだな」

「流明遊夜です」

黒夜さんか…。原作にはいなかったけど…やっぱり、オレ達がいるからかな…それとも、彼女も転生者だったりして…そんなことを思っている、天上院さんがもうすぐ歓迎会の時間ということを知っていたレッド組のオレ達は、急いで戻った。

「…十代、1つ言ってもいい？」

「何を言うんだ？」

「この食生活って…かなり貧乏だよな」

現在進行形で歓迎会での食事中です。ちなみにテーブルは4人席で、オレ、十代、翔、隼人が座っている。レッドの待遇が非常に悪いということを知っていたけどさあ、知っていたけどさあ、食事ぐらい普通にしようよ！

「たしかにかなり貧乏っす…」

「そうか？それにしても、カレーうめえー！」

「まあ…貧乏なのはいつものことなんだな」

「アハハハ…」

現在、オレは自分の部屋にいる。部屋割りは十代達とは違う部屋になった。2人部屋…っていうか予想だとレイちゃんオレのところ来そうなんだけど…。まあいいや。

オレがデッキを確認しようとデッキケースに手を伸ばしたら、PD Aから着メロが流れた。ちなみに流れたのはGX第3期オープニングテーマ。結構いい歌だから着メロにしてるんだよね。とりあえず、メールが来たみたいだから手に取ってみた…ティ・ロップ聞いた後なのに何故かサンダーの音が聞こえた。

「やあ、58番。午前0時にデュエル場で待っている。お互いのエースカードを賭けたアンティールだ。勇気があるなら来い。それとも、ビクビク震えて怯えるのも、いいだろう」

うわ〜むかつく〜叩きのめして〜。よし、とりあえずレッツゴー。

なんとかガードマンに見つからず、指定された時間に、デュエル場につくことができた。十代も呼ばれたから、一緒に来た。おまけで翔も。無論、デュエル場には万丈目とその取り巻き2名がいる。

「逃げ出さずに来たな。言葉通り、アンティールでデュエルを行う。手加減したクロノスに偶然にも勝ったお前たちの強さを確認しようではないか」

「へへ、あれは実力さ!」

「ま、そういうところ。それより、序盤から切り札だした時点で加減なんてしてないよ」

「ふん、まあいい。遊城十代、お前はオレとデュエルしろ。流明遊夜…お前は…」

「万丈目さん、あいつはオレがやります!」  
「好きにしる」

…オレは取り巻きと…か。まあ、別にいいかな…今回は、エースを召喚できるかもしれないし。オレがそんなことを考えていると、足音が聞こえてきた。…もしかして、ガードマン来ちゃった?

来たのは、天上院さんと…黒夜日菜さん…なんているんだろ。

「アナタ達、この時間帯でのデュエルは禁止されているはずよ!」  
「何やっているんだか…まあ、いいや」

「…まあとりあえず…徹底的に叩きのめすだけだから」

そういうとオレはディスクにデッキをセットし、ディスクを起動させた。

「それじゃ、さっそく始めようか」

「け、お前みたいなのヤツなんざ、オレが楽に倒してやるぜ!」

相手も、デッキをシャッフルして、セットした…うん、それが一番かな。そのままセットしたらオレ何か言ってただろうし。

「『デュエル!』」

取り巻きA 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「オレのターン、ドロー!ゴ布林突撃部隊を召喚!さらに装備魔法、魔導師の力を装備!これでゴ布林突撃部隊の攻撃力と守備力は、オレの魔法・罠カードゾーンのカードの数だけ、500ポイントアップする!」

ゴ布林突撃部隊 ATK 2300 DEF 0  
500

…うわ〜先攻取られた〜うわ〜取られた〜。

「これでターンエンドだ!どうだ!お前程度に、この布陣が突破できるものか!」

取り巻きA 手札4 LP4000

モンスター ゴ布林突撃部隊×1(攻)

魔法・罾 装備魔法「魔導師の力」×1（ゴブリン突撃部隊に装備）

「オレのターン、ドロ…1つ聞くけど…その程度？」

「は？」

「攻撃力2800…その程度なら、突破は簡単だけど」

「な、なんだと!？」

まあ…攻撃力3500なら、突破は難しくなるけど…攻撃力2800、しかも守備力は低い…この程度なら、勝てるかな。

「確かに…攻撃力2800なのはいいけど、セットカードがないのは、不利ね」

「まあ、別に問題ないだろうけど…守備力低いゴブ突だし」

「と言うわけで、ゴブリン突撃部隊は倒させてもらうよ。速攻魔法、エネミー・コントローラーを発動！エネミー・コントローラーは、自分のモンスター1体を生け贄にすることで、相手モンスター1体のコントローラーを得るか、表側表示の相手モンスター1体の表示形式を変更する。オレは、ゴブリン突撃部隊の表示形式を変更！」

「な!し、しまった…」

コントローラーが現れると、ケーブルがゴブリン突撃部隊の1体に接続されると、ボタンが押され、守備体制を取った。

「手札からE・HEROフォレストマンを召喚！バトル！フォレストマンで、ゴブリン突撃部隊を攻撃！ウッド・アーム」

オレの場に、緑色の肌をして、頭と首以外の半身が木でできたHEROが現れた。オレが攻撃宣言をすると、フォレストマンがゴブリン突撃部隊のゴブリン1体に殴りかかった。そのまま、ドミノ倒しみたいに倒れていった。

「ちい…!!その程度のザコに…」

「オレは、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

遊夜 手札2 LP4000

モンスター E・HEROフォレストマン×1(攻)

魔法・罫 セットカード×2

「オレのターン、ドロー!ゴ布林・エリート部隊を召喚!バトル!!ゴ布林・エリート部隊で、そのザコを攻撃!」

「トランプ発動!ヒーローバリア!自分フィールド上にE・HEROがいるとき、相手モンスター1体の攻撃を無効にする!」

「ちい…!!ターンエンド!」

取り巻きA 手札4 LP4000

モンスター ゴ布林・エリート部隊×1(攻)

魔法・罫 なし

「オレのターン、ドロー!フォレストマンの効果発動!デッキ、墓地から融合を1枚、手札に加える。オレは、デッキから融合を手札に加える!」

フォレストマンから緑色のオーラがデッキ目掛け放たれた…気にするつもりはないから、デッキから融合を手札に加える。

「マジックカード、融合!手札のアイスエッジと、フィールドのフォレストマンを融合!来い、E・HEROガイアを、融合召喚!」

白くて、水晶のようなものがついているアイスエッジと、フォレストマンが、発生した渦の中に入った。現れたのは、こげ茶色をした、



大型のHEROが召喚された。

「！な、何が来るかと思えば、ゴブリン・エリート部隊と攻撃力が同じじゃねえか！」

「焦らない焦らない。ガイアの効果「ガードマンが来るわ！！」え！？」

うっそー！！ガイアの効果使って、さらにエース召喚して勝とうと思っただのにいいいいいい！！！！！！

「はあ…」

現在、アカデミアの校舎外：ガードマンに見つかる前に、脱出成功でも…あのデュエル勝てたのにいいいいいいいいいい！！！！！！十代はアニメどおりの台詞言ってたし…。

「でも…流明君は危なかったよね？」

「大丈夫。オレが出したガイアには、特殊効果がある」

「？どんな効果っすか？」

「ガイアは、相手モンスター1体の攻撃力を半分にし、その半分にした攻撃力分、アップする」

「え！？それってつまり、えーっと、あの、その…」

「ガイアの攻撃力は2200、召喚時には攻撃力2200をほぼ高確率で与えられるのよ」

翔と十代が若干混乱している…。まあ、予想は若干つくかな…。

「でも…それでも、相手のライフは残るっす」

「オレの手札は、まだあつたけど？」

「んじゃあ、何があつたんだ??」

「このカードだよ」

オレがそう言つて、逃げるときにディスクにセットさせた元々の手札を見せた…1枚は、魔法・畏カードゾーンにはセットされないはずのモンスターカード、E・HEROレディオブファイア、もう1枚…これが最重要の、逆転用のカード。

「ミラクル…フュージョン？」

「これって確か、墓地か場を使つて、融合のE・HEROを召喚する融合カードだろ？」

「そう。これによつて、オレのエースを召喚しようと思ったのに…」  
「…確かに、勝てるわね……」

どちらにしても…勝てたデュエルなのにいいいいいいいいいい！！！！！！

## 第02話 VS万文目の取り巻き（後書き）

誤字、脱字、指摘、感想をドシドシ受け付けております。

### 第03話 翔覗き見未遂？事件（前書き）

遊夜VS日菜：多少ネタバレになりますが、まだ遊夜のエース出ません。

### 第03話 翔覗き見未遂？事件

(遊夜視点)

流明遊夜、ただいま15歳です。オレの誕生日は12月31日だから年越しのオマケみたいな感覚で祝われていた経験があります。え？どっかの発明家商人と同じ日？偶然だと思う。

まあ、取り巻きとのデュエルがあつてから数日後…現在、湖に浮かぶボートの上です。十代と共に…。

「それにしても、翔君いつたい何したんだろ」

「とにかく、翔を助けるぞ！」

まあ…理由は大体分かるけど…。大体分かるけどね。ボートを進めると、別のボートが見えた…2隻ほど。

「来たわね」

「あゝ眠い…とつととコイツ引き渡して寝させて」

「…そういう訳にはいかないわ」

………なんだか一言で雰囲気粉碎されたような…まあいいか。2隻の船のうち、片方には天上院さんと黒夜さん、もう片方には確か、枕田シユンコと…浜口ややえ………何か違う…。

「とりあえず自己紹介したほうがいいと思うから、しておくよ！オレは流明遊夜！次、十代で」

「え！？まあいつか…オレは遊城十代！…まあ、明日香と日菜はもうこっちは知ってるからいいぜ」

「！あんた、レッドのクセに明日香様を呼び捨てにすんな！」

「十代：あんまり親しくない人は、さん付けのほうがいいと思うけど…」

「ん？いや、オレそういうのちょっと難しいんだよな…先生とか以外だと無意識に言っちゃうし」

十代、変なスキル身につけてるね…。年上の人にはさん付けしておこう。じゃないと嫌な印象もたれるから。

「まあ…名乗られたからにはこっちも名乗ったほうがいいわね…枕田ジュンコよ」

「それでは私も名乗っておきます。浜口ももえですわ」

そうそう！通りで違うと思った。殆ど忘れていたけどよく覚えていたオレ！

「アニキ、流明君、助けて〜！」

「あ、翔！」

「…十代、翔君の存在忘れてなかった？」

「……と、とにかく、翔を返せ！」

「無視した！？」「

「残念だけど、簡単に返す訳にはいかないわ」

まあ、大体分かるよ。翔のアカデミア生活の中でも、最大の濡れ衣であり汚点の1つでもあるから。

「こいつは女子寮のお風呂を覗いたのよ！！」

「だから覗いていないっす！！」

「まあまあ翔君、諦めて自主しなよ」

「流明君まで何言ってるっすか！？！ボクは覗いてないっす！！覗いてたら多分ここにいないっす！！」

「ほ、じゃあ覗いていたらどうなつてた？言葉しだいじゃ今すぐこの世とバイバイするかもしれないわよ…？」

あれ？なんだろ、般若的なものが見える、なんだかもすごく怖い般若的なものが見える。黑夜さんの背後にもものすごく怖い般若が見える。

「ひ、ひいいいいいい！！多分校長先生のところかクロノス先生のところに突き出されるっす！！！！」

「ヘックシヨナノーネ！！」

……何者がくしゃみをしたような声が聞こえた方向を全員見た…その後、何も言わずに元の状態に戻した…うん、あれはきつと聞き間違いだ。

「返して欲しかったら、私とデュエルして勝った上で、日菜とデュエルをして、勝ったら返すわ」

「いやいや、あっちがもう1勝したらいいじゃん？もうとっとと寝たいんだけど…2回デュエルはするけど」

「…仕方ないわね。2回デュエルして、1回でも勝ったらにするわ」「おう！」

…まず、十代と天上院さんのデュエルが行われた。まあ、最初は融合VS融合で、天上院さんが優位に立っていたけど…十代の逆転は、逆境あつてこそ。十代がサンダー・ジャイアントを召喚したことで、一気に状況が変わった。

「いつけーサンダー・ジャイアント！！ボルティック・サンダー！

！」

「きゃああああー！！」

「ぎいやあああああああ！！！！！！」

…<sup>クロッス</sup>どこかの誰かさんにもダイレクトアタック。生徒を落としきれようとした罰で正解かな。

「…まあ、これで一勝…といつても、2回デュエルだから、今度はオレと黒夜さんで問題ないかい？」

「とりあえず…気を抜いたら一気に負けるだろうから。最初から全力で来たほうがいいわ…こっちもこっちで、全力出すから」  
「そうする」

そういい、オレと黒夜さんはディスクにデッキをセットした…会話中にどっちもシャッフルしたからね。ディスクが起動して、5枚を引いた。

「デュエル！！」

日菜 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「あたしのターン、ドロ―！手札にあるヘカテリスを墓地へ送り、神の居城 ヴアルハラを手札に！」

「！！！天使族！！！！」

ヤバイ…何故か先攻取られた上に、ヴァルハラを手札に加えられた…あれはマズイ！！

「そして永続魔法、神の居城 ヴアルハラを発動！神の居城 ヴアルハラは、自分フィールド上にモンスターが存在しないとき、1ターンに1度だけ、手札から天使族モンスターを1体、特殊召喚する。私は、手札からアテナを特殊召喚！」



ヴァルハラが発動されると、空から光が差した。すると、光の中から、槍のような武器と盾を持った美しい女性の天使が現れた…かなり厄介だ。

「さらに、ジェルエンディオを召喚。アテナの効果で、相手ライフに600ポイントのダメージを与える。シャイン・シュート！」  
「！く…」

アテナの持つ武器から光が放たれて、その光がオレに直撃した。

遊夜 LP4000 3600

「さらに、アテナの効果でジェルエンディオを墓地へ送り、ジェルエンディオを、守備表示で特殊召喚！アテナの効果でダメージ！！」  
「くう…」

遊夜 LP3600 3200

「ターンエンド」

日菜 手札3 LP4000

モンスター アテナ×1（攻）、ジェルエンディオ×1（守）

魔法・罫 永続魔法「神の居城 ヴァルハラ」

「オレのターン、ドロー！……手札1枚をコストに、ライティング・ポルティックスを発動」

「ちょ！？ま、マジ！！？」

「いつけー！」

このカード引けてよかった…このカードって本当に強力だね。上から雷撃が落ちて、相手フィールド上のモンスターを焼き尽くした。

「モンスターを1体セット、ターンエンド」

遊夜 手札3 LP3200

モンスター セットモンスター×1

魔法・罫 なし

「あたしのターン、ドロロー!!…よし!!」

「？」

「ヴァルハラの効果により、手札からThe splend VENU Sを特殊召喚！」

「な…まさか、プラネット・シリーズを!？」

光の中から…オレンジ色の、女性であろう天使が現れた…The splend VENU S…プラネット・シリーズと呼ばれるカードの1枚…能力がかなり厄介だ…!!

「バトル!The splend VENU Sで、セットモンスターを攻撃!ホーリーフェザー・シャワー!!」

The splend VENU Sの翼から、無数の羽が放たれ、オレのセットモンスター…露になったのは、白い髪をし、赤い鎧をつけたモンスター…ネクロ・ガードナー。

「The splend VENU Sの効果により、天使族以外のモンスターの攻撃力、守備力は500ポイントダウンする」

The splend VENU Sから放たれている金色のオーラ

…ネクロ・ガードナーがその光に当たった…ネクロ・ガードナーが苦しそうに呻いた…この時点のソリッドヴィジョンで呻けるんだ…。そして、無数の羽がネクロ・ガードナーに突き刺さった。

ネクロ・ガードナー    ATK    600    100    DEF    1300  
800

「ターンエンド」

日菜 手札3    LP4000

モンスター    The splendid VENUS x1 (攻)

魔法・罫    神の居城    ヴァルハラ

「オレのターン、ドロー！くっそ…オレは、E・HEROフォレストマンを守備表示で召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

E・HEROフォレストマン    ATK    1000    500    DEF  
2000    1500

遊夜 手札2    LP3200

モンスター    E・HEROフォレストマン x1 (守)

魔法・罫    セットカード x1

「あたしのターン、ドロー！！バトル！」

「ちよつと待ったー！！バトルフェイズ前に、トラップカード、威嚇する咆哮！相手はこのターン、攻撃宣言を行えない！」

どこからともなく獣の遠吠えが聞こえ、空間が震えた。The splendid VENUSが、少し後ろに引いた。

「ち…カードを1枚セット、ターンエンド!」

日菜 手札3 LP4000

モンスター The splendid VENUS x1 (攻)

魔法・罨 神の居城 ヴァルハラ x1、セットカード x1

「オレのターン、ドロー!フォレストマンの効果で、デッキから融合を手札に加える!カードを2枚セット、ターンエンド!」

遊夜 手札1 LP3200

モンスター E・HEROフォレストマン x1 (守)

魔法・罨 セットカード x2

「あたしのターン、ドロー!バトル!」

「またバトルフェイズ前に威嚇する咆哮!」

「何積みしてんのよ…天空の使者ゼラディアスを墓地へ送り、天空の聖域を手札に加え、発動。ターンエンドよ」

天空の聖域が現れると…辺りが、滅びた文明の古代遺跡のようになり、黒夜さんの後ろには神殿らしきものが見える。まずいな…

日菜 手札3 LP4000

モンスター The splendid VENUS x1 (攻)

魔法・罨 神の居城 ヴァルハラ x1、セットカード x1、フィールド魔法「天空の聖域」

「オレのターン、ドロー!フォレストマンの効果で、デッキから融合を手札に加える!そして手札からE・HEROエアーマンを召喚!エアーマンの効果は、このカード以外のHEROの数だけ魔法・罨カードを破壊するか、レベル4以下のHEROをデッキからサ-

ちする効果のうちどちらか：オレは、魔法・罫カードを破壊するほうを選択する。オレが破壊するのは、天空の聖域」

「！カウンタートラップ、神罰！！天空の聖域がある場合、効果モンスターの効果、魔法・罫カードの発動を無効にし、破壊する！」  
「な……」

黑夜さんの後ろにある神殿から赤い雷が飛んできて、エアーマンを焼き尽くした：まさか、エアーマンがやられるなんて……。

「くっそ……手札からマジックカード、融合を発動！手札のフェザーマンと、フォレストマンを融合！現れる、E・HERO Great TORNADO！」

E・HERO Great TORNADO ATK 2800 2  
300 DEF 2200 1700

「グレート・トルネードの効果で、相手フィールド上に存在する表側のモンスターの攻撃力、守備力を半分にする！タウン・バースト！！」  
「！っ……」

The splendid VENUS ATK 2800 1400  
DEF 2400 1200

「バトル！E・HERO Great TORNADOで、The splendid VENUSを攻撃！スーパー・セル！！」

E・HERO Great TORNADOがその名の通り、巨大な竜巻になった……その竜巻が、The splendid VENUSに当たった……が、竜巻がかき消された。The splendid VE

NUSの背中には…見覚えのある、オネスト恐怖の翼が見えた。

「オネストの効果…分かるはずよ。光属性モンスターが戦闘を行うとき、手札から墓地へ送ることで、相手モンスターの攻撃力分、攻撃力がアップする…グレート・トルネードの今の攻撃力は2300、よって…」

The splend V E N U S    A T K    1 4 0 0    3 7 0 0

「うそおおおお!!!」

「いつけー！オネスティ・ホーリーフェザー・シャワー!!」

オネストの羽付きで、無数の羽がグレート・トルネードに突き刺さった…ヤバイ、もう何も対策立てられない。

遊夜    L P    3 2 0 0    1 8 0 0

「あははは…ターンエンド…」

The splend V E N U S    A T K    3 7 0 0    1 4 0 0

遊夜    手札0    L P 1 8 0 0

モンスター    なし

魔法・罫    なし

「あたしのターン、ドロー。デユミナス・ヴァルキリアを召喚。さらにシャイン・スパークを発動。これにより、フィールド上の光属性モンスターは全て、攻撃力が500ポイントアップし、守備力が400ポイントダウンする」

「負けた…」

The splend V E N U S    A T K    1 4 0 0    1 9 0 0  
D E F    1 2 0 0    8 0 0

デユミナス・ヴァルキリア    A T K    1 8 0 0    2 3 0 0    D E F  
1 0 5 0    6 5 0

『日菜…このままトドメでいいな』

「OK。バトル！The splend V E N U Sで、攻撃！」

「悪あがきだけはさせてもらうよ…ネクロ・ガードナーの効果を使  
い、ネクロ・ガードナーを除外して攻撃を無効」

いくらソリッドヴィジョンだからって無数の羽の攻撃を受けるのは  
いやだ…半透明のネクロ・ガードナーがオレの前に現れて、The  
splend V E N U Sの攻撃を全て受け止めた。

「じゃあ、これでトドメよ。デユミナス・ヴァルキリアで攻撃。ソ  
ウル・スラッシュュ！！」

『これで終わりだ！』

デユミナス・ヴァルキリアが喋ったような気がする…オレが気にし  
ているうちに、デユミナス・ヴァルキリアの手にある剣で切られて、  
負けた。

「はあ…」

「まあ、元気出せよ、な！」

「元気出すっす」

「そう言われても…十代以外に負けたよ…ハハハハハ…」

デュエルが終わったから、オレと十代、そして翔の3人でボートを漕いでいる…それにしても黒夜さんって何者だよ…プラネット・シリーズ持っているなんて…。

「…どうだった？十代は」

「かなり強いわ…間違えばこっちが負けていた…そっちは？」

「同じぐらいよ…さすがにイレギュラー系統だけあるわね」

(日菜視点)

レッド組とのデュエルが終わって、あたしたちは女子寮へと戻る道を歩いている。…急いで戻らないとまずいわね…。

「そういえば、イレギュラー系統と、日菜さんが呼ぶ人は、どれぐらいいます？」

「そうね…大体2人よ」

さっつて…波乱の学園生活…どうなるのやら。



**第03話 翔覗き見未遂？事件（後書き）**

誤字、脱字、感想を待っております。

**第04話 月一試験前編 十代達の奮闘(前書き)**

今回、デュエル無しの回です。

完全におまけですが、遊夜の苦手な食べ物も分かります。

## 第04話 月一試験前編 十代達の奮闘

「ひいひい！訳分かんねえ〜！」

「訳分らないじゃなくて分かるつか。じゃないと実技に全てを賭ける自体に陥るよ」

「そりゃあ、さすがにいやだけどよお……」

「遊夜、ここはこう解いたらいいのか？」

「うん、大丈夫、正解だよ」

(翔視点)

ボクの名前は丸藤翔です。って、ボクは誰に話しかけてるんだろ……いや、この際神様でいいや！今ボクとアニキと隼人君は、ボク達の部屋で、流明君と一緒にテスト前の勉強中……それと今ボクは……即席で作った祭壇にお祈り中！

「神様〜！どうかお救いください〜！！」

「……翔君、祈ったらすぐ勉強したほうがさらに効率的だと思うけど」

う……的確に指摘された………まあ、それがいいよね……ボクも勉強しよう………それにしても……。

「なあ遊夜、ここの答えってなんだ？」

「ん？………十代、そこまでいけたのはいいと思うよ……ただ、さすがに4桁×4桁は自力で解こうか……面倒とか関係なく」

「う……まあ、解けなくてもよお……」

「十代……それぐらい小学6年生でもできるんだな」

……アニキ………まあ、一般科目はもう事前に勉強は済んでるから、

デュエルに関することだ。今回は基礎だからっつと…。

「…流明君、このリクルーターって？」

「リクルーターか。リクルーターは、主に、戦闘破壊されることでデッキからモンスターを特殊召喚するモンスターのことだよ。代表例は、キラー・トマト、巨大ネズミ、シャイン・エンジェルかな…丸藤君、君のデッキはどんなデッキだい？」

「ボクのデッキ？機械族のロイドデッキだけど」

「ロイドか…じゃあユーフォーロイドかな。上級だから召喚しにくいけど、光属性だと思うから、シャイン・エンジェルの効果を使えば、確か召喚できるはずだよ」

す、すごい…ボクが驚いていると、隼人君も流明君に質問してきた。隼人君も驚いている…。

「すごいんだな。それじゃあ、この部分は？」

「？墓地肥やし…これは、エクゾディアに使われることがあるよ」

「エクゾディア…あの、特殊勝利のカードに？」

エクゾディアに使われるって、どういうことだろ…エクゾディアは手札に5種類の封印されしのカードが揃わなければ勝利できないのに…ボクの疑問に、流明君は気軽に答えた。

「うん。エクゾディアパーツを墓地へ送って、補助要員や闇の量産工場、ダークバーストを使って回収して、一気に手札を揃えるんだ」  
「！そんな使い方が…」

「他にも墓地肥やしには、墓地にあつて力を発揮するカードを墓地へ送ったりする。まあ、あまりデッキを選ばないネクロ・ガードナーがいい代表かもね。後、やっぱりデッキ圧縮かな…やり過ぎたら負けに近づくけどね。それに、墓地にカードがあることで力を発揮

するカードを使ったり、墓地から切り札級のモンスターを蘇生させたり…後、特定のシリーズカードが数種類揃っていることで、特殊召喚できるキチ外モンスターがいるよ」

す、すごい…流明君、カードの知識豊富だ。アニキはデュエルがすごく強いけど知識は……まあ……うん、置いておいて…流明君は…アニキとのデュエルは今のところ勝った回数は少ないけど、それでも…カードの知識が豊富だ…なら…。

「流明君」

「?何??」

「一通り勉強が終わった後、ボクのデッキ、見てほしいっす!そして、どんなカードがボクのデッキに合うか、どんな戦術を使ったらいいか、教えてほしいっす!」

「いいけど」

よし!ボクは、心の中でガッツポーズをした…一通り終わった後、流明君はボクのデッキを見てくれた。そして、的確なカードを指摘したり、このデッキで使えるカードをくれたり、どんな戦い方をしたらいいかアドバイスも貰った。

流明君がアドバイスを一通り教えてくれた後、アニキも流明君にデッキを見てもらった…このときは指摘したり、アドバイスしたただけで、アニキにはカードをあげなかった…やっぱり、アニキに何回も負けていることに根を持つてるのかな?まあ、流明君に指摘されたカードは、アニキはある程度持っていたから、特に問題はなかった。隼人君も、しっかり教わった。コアラデッキということで、獣族関連のカードを遊夜君から貰った。もちろん、アドバイスも貰った。それで隼人君もアニキもやる気がメラメラ燃えてきたみたいだ…なら…。

「神様〜！どうかボクらをお救いください〜！！」  
「神様努力しないと見放すかもよ〜」

う：ボクは祈りをある程度して、デッキを組み始めた…アニキが見ようとしたけど、流明君が遮った。なんでも、デュエルすることになったら、事前にデッキの情報を知っていることになるからだつて…その後、アニキも諦めたようにデッキを組んでいる。隼人君も同じように…それを見た流明君は、満足したような表情で、部屋を出た。

それにしても…属性の融合HEROってかなりのレアなカードのはずなのに…流明君、どうやって手に入れたんだろ。まあいいや。

翌日、ボクら3人と流明君は寝坊した。ボクとアニキ、隼人君は単純に寝る時間が遅過ぎた…アニキは最後までデッキを組んだりしていたけど、ボクと隼人君は復習感覚で、少しまた勉強をした…気がついたら日付越えていたときは怖かった。

流明君は、目覚まし時計のセットした時間を間違えたらしい…目覚まし時計頼りなんだ。

ボクらが急いでいると、軽トラが見えた…止まっているから……エンジンストかな…？

案の定、軽トラはエンジンストしていた。ボクら4人でトメさんっていう購買部のおばちゃんに乗る、エンジンストしている軽トラを押していった…途中で、エンジンがかかったから、ボクらは荷台に乗った…流明君がやけに絶望したような表情なのは気のせいかな…。

「ぬおおおおおお！！！！！！！！！！」

「ちょ、遊夜速過ぎるだろ!!」

「ま、待つてくれよ!!」

「どうやったらそこまで速く走れるんだな!!」

「死ぬ気になれば人間なんでもできるんだよ!!」とにかく遅刻してたまるかあああああ!!」

な、なんでそこまで遅刻したくないんだろ…って、死ぬ気になれてそこまでできれば本当になんでもできそう…流明君が全力疾走越えの走りについていったから、ボクらは試験開始ギリギリで試験場所についた…ま、間に合ってよかったけど呼吸がうまくできない…。

(遊夜視点)

あゝマジ疲れた…なんでオレ目覚まし時計の時間セットし間違えたんだよ…オレのバカヤロー…!!…今は試験に集中しよ…そうじゃないと実技に全てを賭けることになる…。

「えーそれでは、ギリギリセーフの人達含めて、全員いますニヤ…遅刻しても、それは本人達の自業自得なので、私は責任を取りませんのニヤ」

今回は大徳寺先生か。ギリギリセーフはオレ達だな。急いでいた人そこまですりなかつたし…。大徳寺先生の開始の合図が言い放たれ、生徒は一斉にテストの回答に入った。

…一般科目、なんとか全て終了…結果はまあまあかな…。十代がヤケに絶望したようなオーラ猛烈な勢いで出してるけど…隣にいる翔が若干びっくりしてるし…って、まだテスト終わってないから、気を引き締めないと…次は、デュエルの筆記テストだ。

…酷い。いくら1年の初回だからといって少し酷い。手札の最大枚数があること自体酷い。まあ…フィールド魔法関連の問題があるのは気にしないでいいかな。習ったし…。さて…見直しも終わったから寝よ…。なんだか通路を挟んだ隣の席からやけに絶望したというようなオーラ感じるような…。

「…ん〜！よく寝た〜！…あれ？」

…なんでだろ、誰もいない…なんで？なんで誰もいないの？………そういえば、今日は新しいパックとかが入荷されるって話聞いたよ  
うな…って…！

「寝過ぎしたあああああああ！……！！！」

完全にカードとかパックとかもう残ってないって……！相性いいカードとかあつたらもう後悔とかそういうことよりも酷いショックだよ……！って、今の時間は……。

「…実技20分前か……はあ……」

新しいパック買ったかったな……とりあえず、飯食べにでも行くか……。

「…それじゃ、いただきますっ」と

ドローパン…デュエルアカデミア名物で、十代はドローパンで黄金



の卵を引き当てることの常連になっている…もう強烈なドロー運だよ…それにしても、案外空いていたな…何か忘れていたような気がするけど…まあいいかな。さて…2個買ったけど…どっちも当たり系統でありますように…。

「……………なんで…ウニパン……………」

よりによってウニ…魚の卵系統は苦手なのに…こうなったら食べざるしかないか…。

諦めつつウニパンを完食後、2個目のドローパンを食べた…こっちはチーズハンバーグパン…うん、完璧に大当たり!!

「それにしても…このパック、何が入ってるんだろな」

オレが購買に行ったら、トメさんがこのパックを、今朝のお礼でことしてくれたけど…こうなったら、開けてみるしかないかな。

「(……………融合採取…?なんだこれ……………ちょっと微妙かな…お、パラドックス・フュージョン。これ結構強力だからな…次元誘爆…これもちょっと微妙。…ブーストフュージョン?…まあ、サイドには入れておくとして……………?スパイラル・フュージョン……………! ?な、なんじゃこりゃ…まあ、採用つと)」

…そろそろ試験時間かな…よし、試験会場に行かないと……………そういうえば試験会場どこだっけ…。

「遊夜のヤツ遅いな…」

「何かあったっすかね…」

「確かに…」

(十代視点)

遊夜遅いな…お前の番来たらどうすんだよ……。ん？翔が呼ばれたか…。

「んじゃ、翔、がんばってこいよ」

「で、でも…大丈夫すかね…」

「大丈夫だ。遊夜に見てもらって作ったデッキがあるだろ？」

「そうなんだな。きつと勝てるんだな」

翔ならきつと大丈夫だろ。油断しなけりゃ、きつと勝てるはずだぜ。

「…うん、がんばってみるっす！！」

そう言つて、翔は会場に向かっていった…なんかやけにカクカクした動きだけど…大丈夫か？…あ、ぶつかった……必死で謝ってるな……本当に大丈夫なのか、今更心配になつてきた…。

…あ、遊夜だ……って、いきなり翔にぶつかったな……また謝ってるし…？遊夜……アドバイスでもしてるのか…？お、翔が力強く歩き始めたな。…遊夜こっちに来たな。まあ、聞いてみるか。

「よ、遊夜。さっき翔にアドバイスでもしたのか？」

「十代に隼人君…まあ、そんなところだよ。2人の試験は？」

「オレも十代もまだなんだな」

「そっか」

「…そういや、なんで遅かつたんだ？」

オレが疑問に思つてたことを聞いたら、遊夜が苦笑した…どうした

んだ？

「それが…試験会場分からなくて…」

「そ、そうなのか」

しばらくして、オレが呼ばれた…翔も隼人も試験が終わった後で…遊夜がまだ呼ばれてないけどな。ちなみに、翔も隼人も勝ったぜ。さーで、相手は誰だろな！くうくう！！楽しみだぜ！！

## 第04話 月一試験前編 十代達の奮闘（後書き）

唐突ですが、オリカを募集したいと思います。

基本的に募集するオリカに制限をつけるつもりはありませんが、小説で登場するには、・の部分の条件をクリアするか、使わせてみたいと思ったカードに限定されます。

- ・強過ぎず、弱過ぎないカード
- ・登場するキャラクターのデッキに、ある程度入れることができるカード

なお、キャラクターのカードに関しては、気分に応じて使用するか決まりますので、ご了承してください。

遊戯王以外のカードゲームで存在するカードに関しては、問答無用で使用しませんので、ご注意ください。

後…できればですが、カードのイラストを記述してくださると助かりますので、できればカードのイラストを記述してください。

それでは、感想、誤字、間違いも含め、受け付けております。

第05話 月一試験後編 VS万丈目(前書き)

遊夜「えー、作者からちよつとした思い付きがあるみたいで。できれば本人に言ってもらいたいけど、何故か押し付けられたから言います。」

前書きで何か企画をやるそうです。何をやるかが決まっていますせんが…

ただ、作者が思いついたら企画が始まるそうです。

募集等をするつもりはないそうなので、あしからず…とのことですよ

遊夜に企画宣言を代わりにやってもらったところで、第5話、始まります。

## 第05話 月一試験後編 VS万丈目

「これでオレが攻撃力10000のモンスターを引いたら面白いよな？」

「バカな。そんな都合よく引けるものか！」

「でも、引いたら面白いよな？」

(遊夜視点)

そういえば、ここはアニメと同じかな。たしか、フェザーマン引いてトドメ…だったっけな。

「オレのターン、ドロー!!!…オレは、E・HEROフェザーマンを召喚!!!」

「!!!バカな!引き当てただと!!!???!」

まあ…これで終わりかな。それにしても…相変わらず敵に回したくないくらいのドロー運だ……本当に怖い。

「バトル!フェザーマンでダイレクトアタック!!!フェザープレイク!!!」

「ぐああああ!!!」

万丈目 LP10000

十代のデュエルが終わったか……そういえばオレ呼ばれてないけど…まさかだと思っけどまさかだよ……ね?

「エッソレデッハ20分後にシニョール万丈目準VSシニョール流

明遊夜のデュエルを行うノーネ。ナオ、人数が合わなかったため、シニョール万丈目にはもう1度デュエルをしてもらうノーネ」

やっぱり…まあ、20分は最終調整にでも使うかな…。さて…どんなデッキになるのかな。

「ソレデ〜ハ、シニョール万丈目VSシニョール流明のデュエルを開始するノーネ」

「さつきは油断したが、貴様は絶対に倒してくれる!」

「オレも負けるつもりはないからね」

そう言つてシャッフルし終わった後、ディスクにデッキをセットして、5枚引いた。

「デュエル!」

万丈目 手札5 LP4000 遊夜 手札5 LP4000

「オレの「オレのターン、ドロー!」取られた…」

無理やり先攻取られた…案外まずいかもしれない…。

「手札から魔法カード、手札抹殺を発動!互いのプレイヤーは、手札を全て捨て、捨てた枚数分、デッキからカードをドローする!」

げげ…いきなり抹殺か…融合回収にワイルドマン、スパークマンにヒーロー・シグナル、威嚇する咆哮が…お、融合とパラドックス・フュージョン来た。

「魔法カード、強欲な壺！デッキからカードを2枚ドロー！…一気に行くぞ！オレは手札から速攻魔法、フォトン・リードを発動！手札からレベル4以下の光属性モンスターを1体、特殊召喚する！オレは、V-タイガー・ジエットを特殊召喚！」

へ…フォトン・リードって、確かゼアルのほうで確か…カイトだったかな…それが使ってたカードの1枚じゃ…って、まあいいか。

「さらに永続魔法前線基地を発動！これによりオレは、1ターンに1度、手札からユニオンモンスターを特殊召喚できる！オレは、前線基地の効果を使い、Y-ドラゴン・ヘッドを、守備表示で特殊召喚！！そしてZ-メタル・キャタピラーを召喚！！！」

メタル・キャタピラーを召喚か…。ユニオンはすると思っけど…どうするんだろ。

「オレは、Zメタル・キャタピラーを、Y-ドラゴン・ヘッドに装備する！Zメタル・キャタピラーを装備したモンスターの攻撃力、守備力は600ポイントアップする！！！」

Y	ドラゴン・ヘッド	ATK	1500	2100	DEF	1
600	2200					

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

万丈目 手札0 LP4000

モンスター Y-ドラゴン・ヘッド×1(守)、V-タイガー・ジエット×1(攻)

魔法・罫 ユニオンカード「Z-メタル・キャタピラー」(Y-ドラゴン・ヘッドに装備)、セットカード×1



「オレのターン、ドロー！」

さて…手札最悪だ……融合あつてHEROいるのにモンスターこない…仕方ない。

「E・HEROボルティックを守備表示で召喚。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

遊夜 手札4 LP4000

モンスター E・HEROボルティック×1(守)

魔法・罫 セットカード×1

「オレのターン、ドロー！Y・ドラゴン・ヘッドを攻撃表示に変更し、バトル！Y・ドラゴン・ヘッドで、ボルティックを攻撃！」

「！く…」

「さらに。V・タイガー・ジェットでダイレクトアタック！」

「え！？うわー！」

V・タイガー・ジェットが突撃してきた…スレスレで怖かったからかわしたけど…ソリッドヴィジョンでも怖い…。

遊夜 LP4000 2400

「ターンエンドだ」

万丈目 手札1 LP4000

モンスター Y・ドラゴン・ヘッド×1(攻)、V・タイガー・ジ

エツト×1(攻)  
魔法・罫 ユニオンカード「Z・メタル・キャタピラー」、セット  
カード×1

「オレのターン、ドロー!……(ないよりマシ……いや、あつたほうが断然いい)オレはカードを1枚セット、ターンエンド」

遊夜 手札4 LP2400

モンスター なし

魔法・罫 セットカード×2

「オレのターン、ドロー!……カードを1枚セットし、オレは手札から、命削りの宝札を発動!オレは手札が5枚になるようドローする。そして5ターン後、手札を全て墓地へ送る」

「げげ!!」

うそだろ……こつち絶賛事故ってる状態なのに相手はドローブースト!?!もしかしなくても絶賛大ピンチ!?!

「……カードを2枚セット。そしてバトル!Y・ドラゴン・ヘッドでダイレクトアタック!」

「トラップ発動!くず鉄のかかし!相手モンスター1体の攻撃を、無効にする!!」

かかしが、Y・ドラゴン・ヘッドが撃ってきた光線を防いでくれた……それにしてもかなり丈夫だよな、かかし。

「なら、V・タイガー・ジェットでダイレクトアタック!!」

「おお！何回やってもなれなそう！！」

遊夜 LP2400 800

やばい…これはやばすぎる…ライフが800って…このままじゃ確実にやばい…！！

「ターンエンドだ。さあ、もうサレンダーをしたらどうだ？」

万丈目 手札3 LP4000

モンスター Y・ドラゴン・ヘッド×1(攻)、V・タイガー・ジエット×1(攻)

魔法・罫 ユニオンカード「Z・メタル・キャタピラー」、セットカード×3

「残念ながら、そのつもりはない！オレのターン、ドロー！！」

！天使の施し…助かった！！このタイミングはまさに天使！！…強欲来て欲しかったけど…。

「オレは手札から、天使の施しを発動！！デッキからカードを3枚ドローし、2枚を墓地へ送る！！」

…ネクロ・ダークマン、オーシャン、ザ・ヒートか…。なら、ネクロ・ダークマンと…まあ、元々手札にあった戦士の生還かな。

「オレは手札から魔法カード、融合を発動！手札のオーシャンと、ザ・ヒートを融合！来い！オレのエース、E・HEROアブソル―トZero！！！！」

オーシャンとザ・ヒートが融合の渦の中に入って…現れたモンスターは、白い…鎧みたいな体をした、HERO…オレのエース、アブソルートZero。やっと召喚できた…!!

「バトル!!アブソルートZeroで、Y・ドラゴン・ヘッドを攻撃!瞬間凍結!!!!」

「…だが、Y・ドラゴン・ヘッドに装備されているユニオンモンスター、Z・メタル・キャタピラーの効果で、Z・メタル・キャタピラーを身代わりにすることで、Y・ドラゴン・ヘッドは破壊されない!!」

Y・ドラゴン・ヘッドとZ・メタル・キャタピラーの合体が解除されて…あ、Z・メタル・キャタピラーが攻撃を受けて…凍って、破壊…ユニオンモンスターの身代わり効果って、こんな感じなんだ。

Y・ドラゴン・ヘッド	ATK	2100	1500	DEF	2
200	1600				

万丈目 LP4000 3700

「ターンエンド!!」

遊夜 手札2 LP800

モンスター E・HEROアブソルートZero x1 (攻)

魔法・罫 セットカード x2

「オレのターン、ドロ…!!ちいいい!!Y・ドラゴン・ヘッド、V・タイガー・ジェットを守備表示に変更!!ターンエンドだ!!」

万丈目 手札4 LP3700  
モンスター Y・ドラゴン・ヘッド×1(守)、V・タイガー・ジ  
エット×1(守)  
魔法・罾 ユニオンカード「Z・メタル・キャタピラー」、セット  
カード×3

「オレのターン、ドロー！！バトル！！相手ターンのメインフェイ  
ズ1に、トラップカード、挑発を発動！自分フィールド上に存在す  
るモンスター1体を選択し、相手はそのモンスターしか攻撃できな  
くなる。オレは、V・タイガー・ジエットを選択する」…なら、V  
・タイガー・ジエットを攻撃！瞬間凍結！！」

Y・ドラゴン・ヘッドを攻撃したかった…まあ、そこは仕方ないか  
な。

「カードを1枚セット、ターンエンド」

遊夜 手札2 LP800  
モンスター E・HEROアブソルートZero×1(攻)  
魔法・罾 セットカード×3

「オレのターン、ドロー！！フ…フツハハハハ！！これでキサマは  
終わりだ！！オレは手札から魔法カード、死者蘇生を発動！墓地か  
ら、Y・ドラゴン・ヘッドを特殊召喚！！さらに永続トラップ、正  
当なる血統！！このカードが発動したとき、墓地の通常モンスター  
を特殊召喚できる！オレは、X・ヘッド・キャノン特殊召喚！さ  
らにトラップカード、ゲッド・ライド！墓地に存在するユニオンモ

ンスターを、自分フィールド上のモンスターに装備できる。オレは、Z・メタル・キャタピラーを、X ヘッド・キャノンに装備！」

X・ヘッド・キャノン	ATK	1800	2400	DEF	1
500	2100				

「さらに、Z・メタル・キャタピラーの効果により、X・ヘッド・キャノンの装備から外し、自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚するー！」

X・ヘッド・キャノン	ATK	2400	1800	DEF	2
100	1500				

おいおい…かなり回ってないか、これって…もうピンチになっているようにしか思えないような…。

「手札から思い出のブランコを発動！このカードは、墓地に存在する通常モンスター1体を特殊召喚できる。オレは墓地から、V・タイガー・ジェットを特殊召喚ー！」

？ブランコが現れた…ぶ、ブランコが一人で揺れ始めた…なんか怖い怪奇現象っぽい…って、なんか歪み始めた……ゆ、歪みからV・タイガー・ジェットが…なんてめんどくさい演出…。

「そして手札から、死者転生を発動！手札のカード1枚をコストに、墓地からモンスターを手札に加える。オレは手札を1枚墓地へ送り、W・ウイング・カタパルトを手札に加え、そのまま召喚！」

うわ出た…一気にくるかなこりゃ…。

「そして、V・タイガー・ジェットと、W・ウイング・カタパルトを除外し、VW・タイガー・カタパルトを特殊召喚！そして、Xヘッド・キャノン、Y・ドラゴン・ヘッド、Z・メタル・キャタピラーを除外し、XYZ・ドラゴン・キャノンを特殊召喚！！」

一気に来た…X、Y、Xは重なって、VとWは…まあ、合体かな。こっちの思惑通りになってくれればいいけど…。

「さらに、XYZ・ドラゴン・キャノンとVW・タイガー・カタパルトを除外！合体せよ、XYZ・ドラゴン・キャノン！！VW・タイガー・カタパルト！！」

…こういうのって変形合体っていうのかな…まあ、VWXYZは結構かっこいいからな…お、合体終わった。

「VWXYZ・ドラゴン・カタパルト・キャノンを、特殊召喚！」じゃあその特殊召喚にチェインしてカウンターラップ、パラドックス・フュージョン。オレの場にいる融合モンスターを除外して、相手の魔法・罠カードの発動か、モンスターの特殊召喚を無効にする。オレは、アブソルートZeroを除外」な、何！？」

歪みが、オレと万丈目のフィールドの境目ぐらいに現れて…歪みに、VWXYZとアブソルートZeroが飲み込まれた。なんか、切ないな…。

「くっそ！！ターンエンドだ！」

万丈目 手札0 LP3700

モンスター なし

魔法・罠 セットカード×1、永続罠「正当なる血統」×1

「オレのターン、ドロー!!!」

…強欲な壺…なんて最高のタイミング!!

「手札から強欲な壺を発動!!デッキからカードを2枚ドローする!!!」

…融合回収と、命削りの宝札…結構運がいいかな。

「カードを2枚セットし、命削りの宝札を発動!効果説明は省略!」

…よし、いける!!

「オレはセットされた魔法カード、融合回収と、O・オーバー・ソウルを発動!墓地から融合と、融合素材に使われたモンスターを手札に加える…オレは、融合とオーシャンを回収!さらに、O・オーバー・ソウルは、墓地に存在する通常のE・HEROを特殊召喚できる!」

「バカな!お前の墓地に、通常モンスターなど…」

「最初の手札抹殺で墓地に送られていたのさ!E・HEROスパークマンを特殊召喚!さらに融合を発動!E・HEROバースト・レディとスパークマンを融合し、E・HEROノヴァマスターを召喚!!!」

オレの場に現れたのは…炎を纏った、甲冑のようなモンスター。まあ、別にこのモンスターじゃなくてもよかったんだけどね。



「バトル！ノヴァマスターで、ダイレクトアタック！！」

「ダイレクトアタックはさせん！トラップ発動！！異次元からの帰還！！ライフを半分支払い、除外されているモンスターを、可能な限り特殊召喚する！来い！XYZ-ドラゴン・キャノン、VW-タイガー・カタパルト！そして、X、Y、Zのモンスターよ！！」

万丈目 LP3700 1850

一気にモンスターが出てきた…XYZ-ドラゴン・キャノンだけ攻撃表示…やけに強気だな。でも、これでノヴァマスターの効果が見える！」

「オレは攻撃を続行し、VW-タイガー・カタパルトを攻撃！！フルブーストフレイム！！！」

ノヴァマスターの手から、膨大な炎が放出されて…VW-タイガー・カタパルトを焼き尽くした。

「さらに、ノヴァマスターがモンスターを戦闘によって破壊した場合、デッキからカードを1枚ドロウする！」

…まさかこのタイミングで引くとは…まあいいか。

「手札のカードを1枚コストに、速攻魔法、スパイラル・フュージョンを発動！このカードは自分のターンのバトルフェイズにしか発動できず、1ターンに1度しか発動できない融合カード。手札のモンスター1体以上と、自分フィールドのモンスター1体以上を必ず融合素材に使う必要性がある融合カード。素材条件にあった融合モンスターを、融合召喚する。オレはノヴァマスターとオーシャンを融合し、現れる！アブソルートZero！」

螺旋状の渦が上空に現れて…その中に、ノヴァマスターとオーシャンが入り、アブソルトZeroが、渦から舞い降りた。

「そしてセツトされた速攻魔法、マスク・チェンジを発動！」

「ま、マスク・チェンジ？」

「マスク・チェンジは、自分フィールド上に存在するHERO1体を墓地へ送りに、融合デッキから、生け贄にしたHEROの属性と同じ、M・HEROを特殊召喚する」

「M・HERO?!」

「オレは、アブソルトZeroを墓地へ送り、変身！M・HEROヴェイパー!!」

アブソルトZeroが腰にベルトを巻いて…叩いた。そして、ベルトから光が放たれて…光が収まったら、そこには…仮面　　ダーみたいなモンスターが立っている。そして…万丈目のモンスターが凍りつき始めた。

「な、なんだ!?!」

「アブソルトZeroの効果…それは、アブソルトZeroがフィールドを離れたとき、相手フィールド上のモンスターを全て、破壊する。さつきは、モンスターがいなかったから使えなかったけどね」

「!ば、バカな!オレが…このオレが、負けるだど!?!」

万丈目のモンスターが完全に凍りつき…砕けた。残っているカードは…ない。

「バトル!!M・HEROヴェイパーで、ダイレクトアタック!!」

「う、うわああああ!!!!!!」

「フリアテイクエクスプロージョン!!」

ヴェイパーが飛び上がり…持っている武器で、万丈目を攻撃した。  
そして…万丈目のライフが0になった。

万丈目 LP 18500

「ふう…危なかった…最高のデュエルだったよ、ありがとう」

「く…黙れ!!」

弾かれた…握手しようと思ったのに思いっきり弾かれた…案外痛いんだぞ!

## 第05話 月一試験後編 VS万丈目（後書き）

日菜「なんだかいきなり2話連続で出てないわね…いや、空気男よ  
りマシね…今のところ出てないし…」と、愚痴言ってる場合じゃな  
いわね…。

なんでも、作者が後書きにキーカードか使用オリカの紹介をするっ  
ていう企画を立ち上げて、その紹介の担当は主に私、黑夜日菜よ。  
それじゃ、さっそく紹介ね。

### スパイラル・フュージョン 速攻魔法

手札を1枚墓地へ送り、発動できる。

このカードは、自分のターンのバトルフェイズのみに発動できる。  
自分の融合デッキに存在する融合モンスター1体を選択する。選択  
した融合モンスターの融合素材に合うように、自分の手札にあるモ  
ンスター1体以上と、自分フィールド上に存在するモンスター1体  
以上を選択し、墓地へ送る。選択したモンスター1体を、特殊召喚  
する（この特殊召喚は、融合召喚として扱う）。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは、生け贄にするこ  
とができない。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは、バトルフェイズ  
終了時に、融合デッキに戻る。

「スパイラル・フュージョン」は、1ターンに1度しか発動できな  
い。

日菜「遊夜の使ったオリカ、スパイラル・フュージョン。手札のモ  
ンスター1体以上と自分フィールド上のモンスター1体以上を必ず  
使う融合カード。」

速攻魔法だから、攻撃した後、追撃用に使うことはできるけど、このカードは自分のターンにしか発動できないから、防御に使うのは絶対無理ね。

後、バトルフェイズ終了時に融合デッキに戻るし、生け贄にも出来ないから、そこまできいとは思えないわね…まあ、デストラクト・ポーションや、今回遊夜が使ったマスク・チェンジを使うのがいいわね。

1ターンに1度しか使えないから、連続発動は不可能だから、要注意よ」

今回、前書きに何か企画を、後書きにキーカード紹介かオリカ紹介の企画を立ち上げました。あまりにもさみしかったもので、立ち上げました。

それでは、感想、誤字、脱字、指摘等を受け付けております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6621x/>

---

遊戯王GX ~ HERO ' s F e l l o w s ~

2011年11月16日23時35分発行